

译文 2000.5.3

永川 玲二氏（ながかわ れいじ）英文学者。4月22日、虚血性心不全のため死去。72歳。5月1日に近親者で密葬を済ませており、「永川玲二を偲ぶ会」が27日午後5時から東京都千代田区富士見2の17の1の法政大学第2学生食堂で行われる。留守宅は世田谷区代田5の2の15。喪主は弟、祐三（ゆうぞう）氏。70年からスペインに定住、主に海洋文学史を研究。著書に「アンダルシア風土記」翻訳にプローニュ、風が丘、丸谷オ一、高松雄一氏との共訳でジョイス「ユリシーズ」など。

五 12 2000.5.3

ユリシーズ共訳 永川玲二さん72歳（なが  
かわ・れいじ）――英文学者。4月22日、虚  
血性心不全のため東京都新宿区の滞在先  
で死去。密葬は近親者のみで1日に満たせた。一偲ぶ  
会」が27日午後5時、千代  
田区富士見2の17の1の法  
政大学第2学生食堂で行わ  
れる。スペイン・セビリア  
在住で、連絡宅は世田谷区  
代田5の2の15。喪主は弟  
祐三（ゆうぞう）さん。  
著書に「ことばの政治  
学」、訳書にアラン・シリ  
トー「土曜の夜と日曜の  
朝」、丸山オ、高松雄一  
氏との共訳でジェイムズ・  
ジョイス「ユリシーズ」な

朝 18 2000.5.4

永川 玲二氏（ながかわ れいじ）英文学者。4月22日、虚血性心不全のため東京都新宿区の外出先で死去、72歳。密葬は1白、近親者のみで行われた。「偲ぶ会」が27日午後5時、東京都千代田区富士見2の17の1の法政大学第2学生食堂で行われる。喪主は弟祐三（ゆうぞう）氏。スペイン・セビリア在住。連絡宅は東京都世田谷区代田5の2の15。

著書に「ことばの政治学」、訳書に丸谷才一・高松雄一両氏との共訳でジエイムズ・ジョイス「ユリシーズ」などがある。



和ろうそく職人

# 三嶋 武雄さん

5月28日死去(老衰)87歳

5月31日告別式

みしま

たけ お

岐阜県古川町の和ろうそく店  
三嶋屋六代目はまるで、はなし  
家の小さな小気味良い口上で  
店先にいつも人を集めていた。  
「ちょっと、あなた。ここ  
とこをよく見て、いって下さい  
よ」

沸騰寸前まで熱したロウをお  
けから素手で取り、素早く塗り  
重ねていく。客が感心した様子  
を見せる、「ほれ、これが出来  
上がったろうぞく。ちょっと  
やそつとの風じやあ消えません  
よ。奥にもいろいろあるから見  
ていきなさい」。客を引き込む  
不思議な魅力があった。

「百人でも一人でも同じもて  
なしを」が口癖。人柄にひかれ  
て毎年店を訪れる人も多い。  
「ねやじさんの話を聞くと落  
ち着きます」「また『話を聞き  
に』必ず来たい」。店先に置い

東大野球部の  
を見せた=東

## 語りと人柄で客を魅了

ると、仕事中でも  
人だった=岐阜県  
で/遺族提供

てあるノート「旅のたび」には  
全国各地から訪ねてきた客の感  
想が書き連ねられている。店を  
訪れた客が写し、後で送つてく  
れた写真は何百枚にもなつた。  
七代目をついだ次男の順二さん  
(金毛)も「いろんな人に愛されて  
ました。本当に幸せなおやじで  
すよ」と振り返る。

二十四歳でこの道に入った。

先端にしんを付けた竹ぐしを  
三、四十本束ね、練つたろうの  
中に漬け込んで引き上げる。両  
手で一本一本を回転させながら  
だんだん丸くしていく。両手の  
勘と経験だけが頼りの世界で、  
第一人者と呼ばれるまでにな  
り、一九九七年には「卓越した  
技能者」(現代の名工)として労  
働大臣表彰を受けた。確かに技  
術で二百三十年前から続くれ  
んを守り、後継者も育て上げた。

二月に肺炎を患つてから体調  
を崩し、三カ月後、自宅で息を  
引き取った。

和ろうそく作り一筋に六十五  
年。告別式の祭壇にともされた  
二本の和ろうそくを前に、七代

惜別

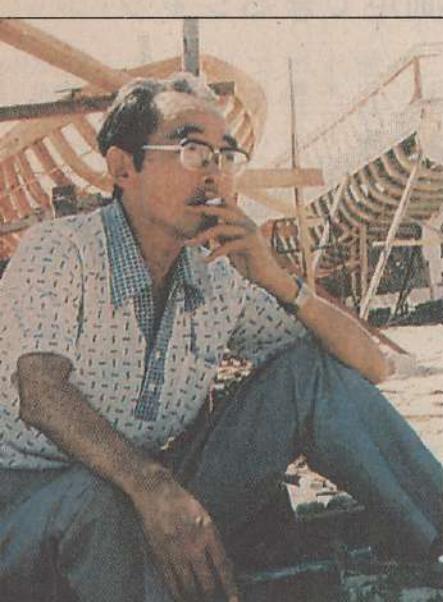
# 永川 玲二さん

4月22日死去(虚血性心不全)72歳

5月27日偲ぶ会

なが かわ れい じ

英文学者



永川さんも東大や都立大の教  
壇に立つたが、「ハムレット」  
の名訳を刊行すると、学園紛争  
さなかの一九七〇年、すべての  
教職をやめ、「ワインの五ド」も  
飲んだら帰つくるよ」といつ  
て、英國に渡つた。

やがてスペインの古都セビリ  
アに居を構え、その大学の客  
員教授をしながら、十五世紀か  
ら十七世紀にかけての「大航海

## 人の輪絶えぬ奔放学者

三人兄弟の真ん中に生まれ、  
陸軍幼年学校から陸軍士官学校

に進んだが、四ヶ月後に敗戦。

東大英文科では同じ師のもと、  
先輩に丸谷才一、後輩に高松雄

一の両氏がいた。三人は三様の  
道をゆき、後に「ユリシーズ」  
を共訳することになる。

永川さんは東大や都立大の教  
壇に立つたが、「ハムレット」  
の名訳を刊行すると、学園紛争  
さなかの一九七〇年、すべての  
教職をやめ、「ワインの五ド」も  
飲んだら帰つくるよ」といつ  
て、英國に渡つた。

しかし、周り不明になると  
エピソードには原稿料を前借  
ることはない。だから、エピソードには  
それを力に生きようとするよ

れば、だれでもエピソードには  
やがてスペインの古都セビリ  
アに居を構え、その大学の客  
員教授をしながら、十五世紀か  
ら十七世紀にかけての「大航海

時代」の研究に

よく旅もした

寝泊まりはたいた

からもらつたオ

テントである。

らなくとも平氣

ら、付き合うのよ

る。旅というよ

のであつたらし

原稿料を前借

ることはない。

エピソードには

ことをなかつ

る。だから、エピソードには

ことをなかつ

る。だから、エピソードには

ことをなかつ

る。だから、エピソードには



セビリアの自宅アパート前で(93年ごろ)

許がないため運転してくれ  
る相棒をヒッチハイクし、  
行く先々で仲間を作った。  
「ユリシーズ」の新訳にか  
かった九五年ごろ、「一か  
月山に行くから、連絡がと  
れないよ」と突然告げ、電  
話した日本の編集者を慌てて  
させた。

生涯、独身を通した。ア  
パートの部屋には、フランス  
語を学ぶ日本人から地元  
の学生まで、始終だれかが  
出入りしていた。訪れた国  
するが、

生き残り、自身を通して  
人生、独身を通した。

死の十日ほど前、カバサス  
さんに言つた。著書は「冊  
だつたが、だれに対しても  
話を作らず、自分の経験や  
知識を直接語ることで、分  
け与えた。

東京・市ヶ谷の法政大学  
の学生食堂で先月開かれた  
「しおぶ会」。「あんなに  
はた迷惑な人はめったにい  
ないのでは。この言葉が今  
夜の会で何度も出るか」と在  
りし日の風来坊を懐かしん

だ丸谷氏は、こう語んだ。  
「初心を忘れ、冒險の意欲  
が薄れた時、神話の中の放  
浪の王子のようになれば生き  
方を思い浮かべることば、  
自分を励まし奮立たせる

のに非常に役立つ気がしま  
す」(山内 則史)

# ままな放浪者

進み、先輩の高齢で得た体験と見聞、ロン  
シードスの、スペインの絶大な影響  
力に关心を持ち、セビリア  
シードスへ。以後三十年近く、この  
町で大航海時代をテーマに  
研究を続けた。

「クスピ  
アシマーノ旅を好んだ。免  
除も後悔していない。

「何も後悔していない。

(山内 則史)

後のストリート・カルチャ  
ー場面を作った街頭紙芝居  
昭和も三十年代に入ると、こ  
の怪奇物によって町角  
追われ始めた。大阪・西成  
居人生をスタートさせ、終戦直  
後、四七年に「絵元」の三回会  
を開いた。印刷された紙芝居  
の全盛時代を迎えた。

子供たちの喜びに還元され、塩  
崎さんが「最後の絵元」として、  
細々ながら紙芝居を現代に生き  
延びさせることが可能になった。

九年、自宅に「塩崎紙芝居博  
物館」を開いた。印刷された紙芝  
居と違い、街頭紙芝居の作品は  
一巻一巻が手描きの原本だ。博  
物館は貴重な約一万巻を収蔵す  
る。その副館長で、自らもイベ  
ントなどで紙芝居を演じる鈴木  
常勝さん(52)は振り返る。

「この四月、お花見の公園で  
久しぶりに塩崎さんが紙芝居を  
演じました。車いすに座り、も  
う大きな声は出ませんでした  
が子供たちは喜んでいました」

その日の紙芝居は、ほのぼの  
とした子供の日常を描いた秀作

「このだわりは、独自の『紙  
芝居』から來ていた。どう  
した口調ながら「大人との  
利害を図る」と語り、紙芝居全盛期  
の利益を図書資料の購入などの  
研究費用にて惜しみなくつき  
るものとの触れ合いの対話が平和  
だった。『テレビでやったもの  
込んだ。その蓄積が、結果として  
者となつた」(川人 献一)

塩崎さん自身「私は貯水池に  
作られた『チョンちゃん』。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。

塩崎さんは貯水池に  
作られた「チョンちゃん」。塩

崎さんも「よく愛したこの作  
物の最後の旅の同行

でした」

最後の一人になつても……

と決意。一九七〇年の大阪  
は語る。「紙芝居は低俗な文化  
をはじめとする各種のイベ  
ントの展示などをやって、こ  
の文化はまだ生きていると  
脚本には高報酬を惜しみません  
とし続けた。